# ラリックの瓶

椎　名　　利

『わたしの女は、春の臀　　そして、グラジオラスのセックス』
（アンドレ・ブルトン『自由な結合』渋沢龍彦訳）

（一）

強い花の香りが匂ってくる。

やはりカサブランカだった。

薄暗いバーの奥に置かれた花瓶には、まだ充分開ききっていないうつむきかげんの花・蕾、大きく開花したものが入り混じりあふれるように生けられていた。

スポットライトの下、濃い茶色の鶏冠のような雄しべを突き出し、複雑な曲面をなして反り返る花びらは、まるで飛び交う蝶のようだ。

花びらの中心から縁にかけ、ゆるやかなグラデーションを示し拡がる黄色に、ちりばめられた茶色の鹿の子模様の斑点が、白い花びらを浮き立たせている。

黒御影のカウンターに対比するかに置かれている、球形のオパルセントグラスのライトは、ブルーの蛍光を帯び、描かれている植物の模様を淡く浮き立たせていた。

蝶の舞を思わせる大柄のカサブランカの中に、純白のアマリリスが混じっている。

その男は、今日もその蔭に座っていた。

山下は、近頃ここに来るとよく見かけるスキンヘッドの男にちらりと目をやった。異常な髪型なので若く見えるが、五十は超えているだろう。

彼は、グラスを静かに揺すり、氷の音を確かめるとウイスキーを口に含んだ。口一杯に広がった芳香の香りが鼻孔を抜ける。

一人で飲んでいるのにはわけがある。今日の会社での課長とのやり取りだ。

（バカな課長め）と、思い出すとどうしても飲むピッチが速くなる。

入社早々には、上司の指示をもっともだと納得していたが、入社三年にもなると言われること自体腹立たしく、なぜか反抗的になる。

今朝も、私が提出した室内競技場のラフスケッチを見て、

「おい、このような吊構造の屋根はメンテナンスが大変だからやめろ。建築は格好だけじゃない」と、ぬかしやがて……。

山下は、（俺だって構造設計屋が文句言うのは判っている。でもそれにチャレンジするのが創造性では…）と、出かけた言葉をのみこんだのだ。

ふと、通勤途上で見た電車の中吊りの『スカウトしたいエンジニア』といった、リ

クルート誌の広告を思い浮かべながら、（転職するなら早いほうがいい）などと、腹立ちまぎれに考えていた。

腹たつ原因はまだある。

むしゃくしゃするので、いつものように美耶子誘ったのだが、「今日はだめよ」と、軽くあしらわれた。

（最近どうも俺を避けようとしている……。子持ちの彼女はセックスフレンド過ぎないのは事実だが……）。冷たくされると一層、美耶子の分厚い肉体がちらつく。

（ちぇ、最初に仕掛けてきたのは彼女ではないか……）

その日、梅雨明けが近い七月の初め、いつものように家庭教師先に出かけると母親の美耶子から、娘が戻ってこない言いわけをくどくどと聞かされた。勉強が好きでない彼女のこのような行動はたびたびなので驚かなかった。「まあお茶でも」との言葉で、リビングルームでビールを口にする。美耶子もおいしそうに飲んでいた。ここまではいつものとおりだった。

しかし、それから先がいつものシナリオから少しずつずれ始めた。

例年より遅い梅雨明けのせいか蒸し暑い。クーラーがかけられていたが、彼女は薄手のカーデガンを外した。ベージュのぴったりと躯にはりついたニットのワンピース。大きくスクエアにあいた胸元。ノーブラの乳房。

踝までかかるスカートのサイドのスリットから覗く大腿部が妙に白く、豊かな腿のわりには締まった足首を覗かせていた。

彼女の幾分出始めた下腹は、腰の丸みと溶け合い、成熟した女性を見せている。

彼女が厚みのある唇をすぼめるようにしてビールを飲むと、上向きかげんの顎の白い喉元が、ビールの流れに従って脈動するのが艶かしかった。

たまに首を傾げ、なぜか微笑んだ。

その気をそそるかの彼女のサインは、未熟な山下にも充分理解できた。

導かれるままに夢中で抱きつく彼を、彼女が軽くいなすと、山下は、突然襲ってきた快感に戸惑いながら、なすすべもなく果てた。

「童貞って、かわいいわね。それに初めての女性は忘れられなくなるそうよ」

微笑みながら美弥子は山下の唇を軽く噛んだ。

四年も続いている彼女との関係がその言葉を証明していた。

最近では、裸体だと下腹がかなり出てきているのがわかる、肉厚の彼女のどこに魅力があると言うのだろうか。母親ほども離れた女を……。

だが、……、なにか若い女にはない魅力があり、なぜか美耶子とは離れ難かった。

そのことが入社同期の聡美との結婚に踏み切れない理由だが……。

妄執を払いのけるかに残りのウイスキーを一気に空け、お代わりを頼もうとグラスを上げると、マスターが

「うちのオーナーからです」と、オリーブの入ったカクテルを彼の前に置いた。

山下は、マスターの向けた視線の方に目をやるとそれは、奥に座っている例のスキンヘッドの男だった。山下がお礼のつもりでグラスを上げると、その男も軽く乾杯の仕草をし、立ち上がると隣にやって来て腰を下ろした。

「バーテンの腕前は、マテニィーを飲んでみると一番よく分かるのですよ。私はいつもそれを厳しく言ってマスターを教育しているのですがね」

この話を聞きながら山下は、（これが以前､マスターが話していたマテニィーしか飲まないオーナーか）と思いながら、薦められるままに口にすると幾分ドライに作られたマテニィーは、ベルモットの酸味がジンの松やにくささを引き立てきりっとしている。

（なるほど美味い）と、山下は呟いていた。

ぼそぼそと彼が話す様子から判断すると、このビルは彼の持ちビルらしかった。

（俺みたいに宮使えの苦労がないのは羨ましい）などと思いながら、それとなく彼を観察すると、ベージュの薄い綿のタートルネックに、紺のダブルのジャケットで、胸にはベージュのポケットチーフを覗かせていた。

ビジネスマンによくある機敏さとは異なるおっとりとした雰囲気を感じさせる彼の話っぷりが、山下をリラックスさせていた。だから、彼が自分の部屋に誘った時、喜んでそれに応じたのだった。

バーを出た廊下を左に折れ、階段を数段下りたところの壁に彼が触れると、エレベータのドアが開いた。驚いている山下を男は笑いを含んだ目で乗るように促した。ドアが閉まる瞬間、靄が立ち込ると睡魔に襲われた。再びドアが開いたときは先ほどの眠気は嘘のように去っていた。

『山上』と表札のある部屋に入る。

山下がソファーに座ると、すでにテーブルには料理が用意されていた。そっと山上の様子を伺いながら部屋を見渡すとリビングルームの左手がベッドルームのようだ。

分厚い絨毯の引き詰められた部屋は、かなり上層階のはずだが窓がなく、薄いクリーム色に淡く花柄が描かれた壁紙が貼られていた。壁には二十号ぐらいのミュッシャの絵がかけられている。

山下がふと山上の後ろのサイドボードに目をやると、裸で戯れる男女がレリーフされた香水瓶と少女の裸像が描かれたアトマイザーがあった。

（ラリック？）と、思わず呟いた山下の視線に気づいた男は、

「アトマイザーは、レプリカですがね、でもよく出来ているでしょう」

この男は、高価な美術品を収集出来るほどの資産家なのだと改めて羨望の眼差しを向けると、それを意識したのか男は、例の呟くような口調で

「人間、何が幸運を呼ぶかわからないものですな」と、頭をつるりと撫ぜると語りだした。

（二）

両親を早く失い身寄りのなかった私は、Ｔ大建築科を　卒業すると――このことは今では誰も信用してくれないのですが――、某省に採用され、エリート官僚の道を歩み初めました。入省して三年目に汚職事件が起きたのです。

その事件で、私の直属の上司が自殺し、彼になんとなくシンパシィーを抱いていた私は､何か同情的な発言をしたのでしょう｡その発言が部長をいたく刺激したらしく、私は危険人物とみなされ、ある外郭団体に出向を命じられました。

転出先ではろくな仕事もあたえられず、無為の日々を　過ごしていました。当たり前ですよね。秘密が漏れると思っているわけですから、重要な仕事など私に任せるわけがありません。

すっかり自堕落な生活を送っていたため、半年も経つうちには、同級生の恋人も、私の元を去って行きました。

ちょうど、彼女と最後にお茶を飲んだ喫茶店でコーヒ代を支払った時、商店街での抽選券をもらいました。

その一枚の抽選券が、なんと私に軽自動車をもたらしたのです。

男は、無造作にウイスキーを注ぐと一口呷った。

「私の運はこれから始まりました」

ある日、私は渋谷の松涛の狭い一方通行の道に迷い込み車を走らせていると、自転車に乗った中年の女性が突然わき道から飛び出してきました。注意して走っていたのですが、一瞬、頭が真っ白になり避けようとして電柱に衝突してしまいました。

気がつくと、病院のベッドの上に寝かされ、自転車の女性はかすり傷もなく、しきりに詫びを述べるのでした。

けがは、肋骨の骨折でしたからたいしたことはなく一週間ほどで退院出来ました。

入院中の会話で、私に身寄りがないのを知ったその女性は、自分も一人身だから、

後の療養期間を彼女のところで過ごしてはとの提案で、同意した私は彼女のところに住むようになりました。今では正確な位置は分かりませんが、当時は、瀟洒な家が並ぶ高級な地域だったと記憶しています。

私は、勤務先には離婚したお袋の元にいることにしていました。年格好から見ても誰もそれを疑う様子は　ありません。それに誰も私なぞに関心を持っていないのですから…。

当時四十半ばだった彼女は、別れた夫から貰った不動産を元手に、子供服の製造販売の事業を手掛けていました。

彼女によると、中堅の下着メーカーを経営していた彼女の夫は、有能な経営者でした。と同時に女に対してもなかなかのようでした。しかし賢明にも彼女は、彼の中から将来の社会の姿を学び取っていたのです。

当時、大量生産から生み出される画一的な商品は飽きられ、やがて個性が求められる消費社会の到来を予測すると、子供のファッション産業に目をつけたのです。

六十年代の初め頃から、既に人口構成から推し測るとベビーブームが到来するのは目に見えていましたが、それを具体的な形で捉えたのは彼女の事業家としてのセンスのよさでしょう。

「あの『かっこう鳥マーク』の子供服、ご存知でしょう。彼女は子供服のファッション分野で画一的商品に飽きた親たちの　欲望を巧く捉えたのです。そう、ある意味では親たちの夢を叶えたと言うべきかもしれません」

退院後、彼女の家で療養していたわけですが、彼女は普段、通いのお手伝いさんに家事を一任し、おおむね外で夕食を済ませて家に戻ると、私と好きなアルコールを飲みながら時間を過ごします。

そんな時でも、彼女は急にひらめくと傍のスケッチブックに子供服を描きました。

ある時彼女は、

「スケッチは出来ても、これを型紙にするの、結構厄介なの」と語ったのです。

つまり、彼女は出来あがりの形は想像できるが、それを再現するためにはどのような型紙を作ったらいいのか、例えば、ボール状の物を作るのに生地をどのように裁断するのかがわかりにくかったわけです。

私は建築屋ですから立体を見てその展開図を想像するのは容易でした。つまり、彼女がスケッチする子供服の肩の膨らみをだすためにはどんな型紙をたてばいいかということです。

一日中、暇な私は早速彼女のスケッチを型紙にデザインしてみました。

翌日、それを持って会社に出かけた彼女は珍しく夕方早くに戻ると、見事に自分の考えていた洋服が出来たと興奮して私に語り、また私は数枚のスケッチの型紙デザインを依頼されたのです。

療養生活も一ヶ月になる頃には、私は完全に彼女の　アシスタントになっていました。そして仕事に戻るれる頃になると熱心に自分と一緒に仕事するのを求められました。

元々、つまらない外郭団体にていよく左遷され、ろくな仕事もあたえられていなかった私は、仕事に執着心などあろう筈もなく、その申し出を受けたのです。

最もそれだけの理由ではないのですがね。

え？、もうお気づきでしたか。

そうです。彼女と関係が出来ていたました。

そう、私は二十五才でした。勿論、女を知らなかったなどとは申しません。でもすでに更年期近い女性とそのような関係になるのは不思議でしょう。

さすがに乳房も張りを失い始め、下腹も少し出ているのですから…。

でも、セックスって面白いものですね。肉体だけではないのです。つまり、本来的には生殖の手段であったセックスから人間だけが快楽を抽出したのです。オーガズムを感じるためにはかなり発達した脳新皮質が必要なのだそうです。

『ブラセボ効果』、ご存知ですか。

そう、お医者さんに薬効を聞かされて飲むと単なる　澱粉みたいな粉でも効果が出る、あれです。暗示、まあ、錯覚といってしまえばそれまでですが。

この『ブラセボ効果』が、性的な面で発揮されたのがフェティシズムです。性行為が個人の文化によると言われるのはそのためです。

ここまでお話しすると、私を満足させた妄想がなにかおわかりですね。

そうです。母親を犯すと言う感覚、つまり、インセスト・ラブです。

よく、『強姦は下流、姦通は中流、近親相姦は上流社会の犯罪』と言われていますが…。

彼女は、子育てなど家庭的な雑事から一切自由でしたから、休日は、よく二人で工芸品を観に博物館などに出掛けました。多分デザイナーとしての職業的な意識もあったと思います。

特に、アルー・デコ、中でもルネ･ラリックを好み収集していました。

旧朝香宮邸―庭園博物館―は何度となく一緒に訪れたところです。玄関の扉に描かれている今にも飛び上がるかのような女神像。幾何学的な円形の光背を背負い胸を突き出すようにし瞑想する女性は、ガラスに描かれたと言うより彫刻されたと言うべき作品ですが、私も初めて観た時からそのすばらしさに魅せられていました。

そのような生活の中で事業は順調に伸び、実に毎年　倍倍の売上げ増で、あっという間に子供服分野の有名ブランドとなっていました。

こんな生活が五年ほど続いたでしょうか、ある日、彼女は心臓発作であっけなく亡くなってしまったのです。

彼女は、私を養子として入籍していましたので私が　事業を継ぎ代表者となり運営するにはなんら差し支えなかったのですが、事業の味を覚えた私は、自分の長年の夢、自分の街創りを実現してみたくなり、外国でよく行われている事業の売却を考えたのです。

好調の時の売却ですから高い値が付き、私は街造りに十分な資金を得ました。

この話は一時週刊誌でも話題になりましたからご存じかと思いますが…。

私は有明に土地を得て街造りに着手しましたが、計画半ばでバブルがはじけたのです。せめてもう二年早ければ持ちこたえられたかもしれませんが。残ったのはこのビルと…、ははは、あのラリックだけです。

語り終えた山上は、頭に手をやるとあたかも髪をかきあげるような仕草をすると、顔を上げ、遠くに目をやった。

（三）

山下は、この話を上手く出来た身の上話と思って聞いていたが、サイドボードに並んでいるラリックの作品を見ると事実かもと思わざるをえなかった。

ふと、先程の香水瓶に目をやると山上は微笑み、

「ラリックが気になるようですな。彼女が亡くなってからは、私が集めました。初めはよく偽物をつかまされ、そのため勉強しました。あなた、このアトマイザーが偽物だと言う証拠、なんだと思いますか」

その瓶を手にするとそこに描かれている少女に語りかけるかのように、

「彼は単なる芸術家ではなく、事業家としても優れた資質に恵まれていたのです。一八八〇年頃、彼はすでにカルティエ・ブーシュロンなどと契約を交わす一流の宝石デザイナーで、アールヌーボースタイルの作品を次々に発表していました。しかし、彼のすごさは、いち早く大衆社会の到来を予知したことです。ですから宝石・貴金属と言った高級な素材を使った装身具のデザインだけでなく、ガラスみたいな安い素材に目を向けたのです。

この契機となったのは、一九〇七年、Ｆ・コティとの出会いだったのです。

コティは早くからラリックのデザイン感覚に目をむけ香水瓶のラベルのデザインを依頼したのですが、ラリックは香水瓶を造ることも提案し同意を得ました。依頼を受けたラリックは、量産化を真剣に考え、それまで人手に頼っていた工芸品の量産化を機械化で実現しようとしたのです。人手によると個人的なばらつきがひどく、粗悪品が多かったからです。彼のコム・ラン・ビル工場は近くで上質のシリカが得られ、機械化されたこの種の最初の工場でした。彼は、ガラス素材としてセミ・クリスタルを

好んで使用しました、これは造形適合性が高く、安価で量産に向いていたためです。セミ・クリスタルの鉛の含有率は二十四パーセントなのですが、このアトマイザーは光学分析によると実に三十五パーセントの鉛があるのです。つまりクリスタルなのです。その事実からするとこれが偽作の可能性が高いと言うわけです」

彼は、自分の言葉に酔ったかのように熱っぽく話し続けた。

「二十世紀の美術は前衛的なキュービズムに始まるといわれていますが、基本的技法の見直しも行われています。つまり、線の重要性も再認識されているのです。この豊かな線を見てください」

山上は、振り向き香水瓶を取り上げると、

「この女性の臀の感じなど、なまなかの女性よりはるかかにエロチックだとは思いませんか」

彼がさしだした蔦模様に縁取られた瓶には、裸で戯れる一組の男女がレリーフされていた。

若者とキスする裸婦は、高く手を伸ばし躯を大きくのけぞらせている。わずかにひねられた後姿の上半身から乳房を覗かせ、細い腰をしならせると、片手に小枝をかざす若者の愛撫にまかせている。

細いが弾力性を感じさせる上半身、締まった腰を豊かな肉づきの臀が支えている。大胆に描かれた臀部の二つの隆起が成熟した女性の立体感をつくりあげていた。

いくぶん茶色に着色された釣鐘状の梨肌の瓶に浮かぶその姿に、山下は魅された。

「これは『誘惑』と言う一九一二年の作品ですが、こんな質感を持ったエロチックな表現を出来る人は、彼をおいていません」

興奮して語っていた山上は、例の呟く口調でにやりとし、

「ははは、でも、やはり本物とは違いますかな…」と言うと、裸婦がレリーフされた香水瓶を取り上げ、ポケットからベージュのポケットチーフを取りだし瓶に被せた。

一瞬、山下が瞬くと彼の後ろに女が立っていた。

その女性を見たとき、山下はあまりにも美耶子に似ているのにびっくりした。彼女は、美耶子が好んでよく着る細いプリーツのワンピースを着ていた。ゆるい胴周りの黒いロングドレスが肉づきのいい彼女にボリューム感をあたえている。

女は、ドレスの裾に手をやり整えると山上の横に座った。

パーマをかけなくてもボリュームが出る髪なのか、顔の輪郭に沿う形で軽くカールした髪は襟元でカットされ若さを感じさせるが、落ち着いた物腰からみると、四十近くと思われた。丸みをおびたフェースラインが温かみをかもしだしている。

女は、小皿に前菜を盛ると差し出した。

「山下さんも建築家だそうですね」

山下がびっくりして女を見つめると、

「彼からよくうかがっておりまわ」と、こともなげに応えると（なんでも知っていますよ）と、言わんばかりにいたずらっぽい視線を山下に投げかけた。

山上はと言うと、いつの間にかうたた寝をしている。

「いつものことですわ」女は困った様子も見せず、「すこし眠ったら」と、山上を促すと隣の部屋へと導いた。

戻ってくると女は、自分のグラスにワインを満し、香りをかぐようにグラスを顔に近づけ一口含むと、

「男の人って、みんな自己顕示欲が強いのですね。わたしは流れに身を任せてますから、星占いを信じています。流れに逆らって泳げるとは思っていませんし、自分を最大限に生かすために星占いを利用しています。山上なぞ、今でも性懲りもなく自己実現のチャンスを窺っているのですよ。流れに逆らったために失敗したと言うのに…」

山下は、山上の関係がわからず戸惑っていると、女はあけすけに喋りかけながら、少なくなった彼のグラスを取り上げるとウィスキーを満たした。

「あの人の昔話、すでにお聞きですわね。男の人にとって、年上の女性っていかがなのですか」

先ほどから、美耶子を思い浮かべていただけにあわてた。女の笑みがさらに困惑を拡げた。

美耶子の引力空間から抜けられずにいるのを知っていて、からかわれているような錯覚をいだくと思わず目を伏せた。

「あら、わたしは山上の場合でも、オーナーの女性との関係を不潔だとも異常だとも思いませんのよ。互いに幸せだったのではないかと思っているくらいです。なぜって…、男女の仲は愛だけだとは考えていません。セックスは、男女のコミュニケーションの一つだと思いますわ。それにセックスのない社会なんて…、モノクロ写真の世界と同じではないですか」

女は、空のアイスペールを持って立ちあがり、私に視線を戻すと

「私も若い恋人がおりますのよ。呼んでもいいかしら？」

山下は、話題が変わったのにほっとしてうなずくと、女は持っていたアイスペールを置き、隣の部屋を覗きこみ、彼が寝ているのを確かめると、ドアを静かに閉めた。

女は、笑顔を見せながら、テーブルの上に山上が置いていった先ほどのポケットチーフを取り上げると、ラリックの香水瓶に被せた。

どこかで空気がわずかに動いたけはいがすると、女の横に若者が立っていた。

ベージュのチノパン、濃紺のボタンダウンのシャツ。

「あら、この間のものね。良く似合うじゃない。あなたは痩せているからＴシャツな

どは似合はない、襟があるほうがいいわね」

ツータックのズボンが、腰の周りをゆったりとみせ、半袖のシャツから見える腕は褐色で毛深く、手首には薄いシルバーの時計がはめられていた。

若者は、女にはにかんだ視線を投げると、山下に向かってていねいに頭を下げる。そのぎこちなさの中に律儀さを感じた。女の横に座ると身を硬くしている。

「娘の数学みてもらっているの。理数系が得意で将来、天文学を専攻するそうよ。わたし、初め、星占いのこと質問したの。だって天文学って星占いだと思っていたのですもの」

女は、若者にも水割りを渡すと、若者の服装を点検するように全身を眺めわたした。

多分、若者の服装は女の趣味なのだろう。ちょうど子供に自分の好きな服を着せて楽しんでいるみたいに…。

ふと、山下は、美耶子との情事を思い出しながら、二人のもつれ合う姿を妄想していた。

裸の躯を横たえた女は、若者を胸に抱くと、顔をすり寄せキスした。軽く触れていた若者の唇が女に捕らえられる。進入してきた女の舌が執拗に若者の舌に絡みつく。やがて女が少し身を起こし、乳房を突き出すと……。

（駄目だ）山下は、思わず限りなく膨らんでゆく妄想を追い払いながら、この若者に目をやると、行儀の良さは崩れていなかった。なにか話さなくてはと思いしゃべりかける山下の言葉にも、相槌の短い返事しか返ってこない。

そんな会話をしている二人を、女は見比べながら、一人で思い出し笑いをしていた。

この若者を見ていると『鏡の中の自分』をみているようだ。

隣の部屋の物音で山下は、山上が寝ているのを思い出し、女に目をやると、女は気にする様子もなかった。

しかし、山下は隣室が気になる。気持ちが落ち着かないままに彼に

「天文学のどこが好きなの」と聞くと、初めて言葉が返ってきた。

「今、光っている星。それは、一億年前に爆発した星の光が今地球に届いているのかも知れない。そんなこと、信じられます？　でも事実です。まだわれわれ人類など誕生してない時に起こったことが今届く。ロマンチックではないですか」と語ると、若者は細い目をあげてふと例の香水瓶に目をやった。瓶は周りの文様模様はあるもののなにか中心部が不鮮明だった。

隣の部屋から再び物音がする。寝返る音か。はっとして女を見たが聞こえないのか二人で話している。

大丈夫なのだろうか？　しばらくすると今度は明らかに山上の声がする。とがめるような目を女に向けると、

「あの人の寝言なの」と気にする様子もない。

（山上が承知の仲なのだろうか）と、考えながらグラスを口にしていると、何度目かの物音に、

「あの人、わたしがそばに居ると寝言言わなくなるのですよ。子供みたいでしょう。しばらくいてやりますわ」と、立ちあがり隣の部屋に入った。女の言うとおり寝言はおさまった。

二人になると山下は、彼に

「君、あの人を愛しているの？」と小声で聞くと、

「え…、愛とは違います。でもなぜか離れられないのです。僕をとてもよく理解してくれていて、なにかとアドバイスしてくれるのです。それにあの人、初めての…」

言葉を切った彼は顔を赤らめるとうつむき、グラスに手を伸ばし一口飲むと黙ってしまった。

急に襲ってきた沈黙に山下はあわて、

「いや僕も経験があるので…」と、いらぬことを口にしていた。

「山下さんにとって、その女性は…」

山下は、兄貴ぶった話しっぷりと笑いでごまかしていると若者は、

「ぼくにも幼馴染の恋人がいるのですが、会ってみていただけませんか」と、真剣な眼差しを山下に向けてきた。

山下が了解した顔つきをすると、若者はベージュのハンカチを手にすると香水瓶に被せた。

現れたその少女は、髪をセンターできっちり分けると左右にたらし、襟元を覆った髪の毛を、肩の上でゆるくカールさせていた。

肩が広くのぞくラウンドネックのサテンのワンピースからしなやかな腕を覗かせている。ノースリーブのシンプルなドレスが、ほっそりとした首を長く見せていた。濃い茶色が白い肌によく映える。

少女は、山下との挨拶もそこそこにソファーに座ると、彼に抱きつき、いきなりキスした。ソファーの背に押しつけられた若者は、息つくまもなくその激しさに応えていた。膝の上に半身を預けた少女の顔からたれる長い髪が若者の顔を覆う。それは何光年も彼方からやってきて久々に逢った恋人たちのようだった。

山下はその積極的な少女を目にすると、唐突に今日、会議の席で示した聡美の態度を思い出していた。彼女は課長が否定的だったにもかかわらず、山下の案に賛成の意見をとうとうと述べた。噛み付いたという方が当たっているかもしれない。不意に何事によらずアグレッシブな姿勢の彼女が愛しくなった。

攻撃的な少女の姿勢が一頓挫すると、若者は少女の細い腰に手をやり引き寄せた。

主導権を得た彼が抱きかかえるようにして唇を吸う。

人前も辞さない大胆な行為を、山下は、不思議と不快には感じなかった。映画の場面を見ているようにその行動を眺めていた。

時々隣の様子に耳を澄ませる。物音はしない。

腰に回された若者の手は徐々に背中に移ると少女をいたわるように撫でていた。

寝室へいった女がいつ戻ってくるかわからない。気になって二人に目をやるが、その激しさに気押されて声をかけることも出来ない。女だってこの若者が恋人を持っていることぐらいは知っているだろう。しかし、こんなところに戻ってきてはかわいそうだ。

ベッドルームのドアにそっと目をやる。急に開いて女が出てくるような錯覚に襲われる。

わずかに衣擦れの音がした。

マーラーの音楽のようにいきなりフォルテシモから入った若者たちの愛撫も、アンダンテにさしかかったようだ。ふと流し目で見た彼が、山下の不安そうな様子を読み取ると、静かに少女を離し、例のベージュのポケットチーフを握らせた。

目の前から少女が消えると、握っていたはずの見覚えあるベージュの布がテーブルの上に残されていた。

若者が身繕いを終えるとほぼ同時に、隣室のドアが開き、ロングドレスのスカートを少しあげるようにして、急ぎ足でくだんの女が現れた。

「彼、もう起きそうなの」と呟くと、いそいで若者にベージュの布を持たせたか思うと、若者もいなくなった。

「いやあ、失敬失敬。お呼びしておいて寝てしまって…。充分おもてなししてくれたのだろうな」

女のふくよかな笑みがそれに応えた。

「それでは、そろそろおひらきにしますかな」と山上が呟くと、女がポケットチーフを握った。

ソファーでは、今起きてきたばかりの山上が一人で手を頭にやると、山下に笑いかけた。

山下があわてて、周りを見まわすと香水瓶の裸婦が目についた。

「そう、今日のお土産にこのアトマイザー、レブリカですがお持ちになりませんか」と、彼はアトマイザーをポケットチーフにくるむと私に握らせた。

霧が濃かった。その上暗闇だ。

わずかな明かりが霧を通過し乳白色の靄となっている。明かりの方向に辿る。不思議に物音一つしない。

夜明けなのだろうか。

明るさが増してくるとどこからか芳香な香りがしてくる。

匂いを辿る。花のようだ。だんだん強くなる。

（ああ、カサブランカだ）

「だいぶ、お疲れのようですね。お目覚めですか。お冷でもお持ちしましょう」

バーテンは、そう言うと氷を浮かべた重量感あるグラスを私の前に置いた。

（夢を見ていたのか？）

電車の中で寝ることはあってもこんなところで寝たのは初めてだ。そう思ってそっとあたりを見まわしたが、一人なのでほっとした。

無性にタバコが吸いたくなった。

ラークを咥える。

ライターは、といつもの右のポケットに入れた手が硬質のものを捕らえた。

取り出してみるとアトマイザーだった。

丸みを帯びた金色のスプレー部分は輝きを失っているものの、透明な瓶に浮き出た胸に手を組んだ少女の裸像が、乳白色の淡い青みを帯び、山下に微笑みかけていた。

ふと、奥の花瓶に目をやると、黄色い蝶が一斉に舞い上がるのが見えた。（２００６年８月１日）